

キャリア転

第25回

柳内伝統音楽院 主宰

柳内 調風さん

—私のキャリア転機—



やない ちょうふう

6歳より生田流箏曲、8歳より琴古流尺八を学び、その後も声楽・指揮法・作曲を習得し、多くの合唱団・合奏団常任指揮者を務める。箏曲・三絃・尺八の演奏家、作曲家として世界を舞台に活躍している。また、邦楽の演奏家としては初めて『国際アカデミー賞』『国際文化功労賞』を授賞したほか、国士舘大学21世紀アジア学部の客員教授、柳内調風塾、株式会社「柳内」など2社の代表取締役社長、他2社の相談役なども務める。

<http://www.yanaico.netfirms.com>

お問い合わせ：yanaico@oak.ocn.ne.jp

箏曲・三絃・尺八の演奏家、作曲家として世界的に活躍をする柳内氏だが、その実、衆議院議員秘書を務めたり、国士舘大学の政治学科第一期生として、大学創立者である柴田徳次郎氏などから直接の指導を受けるなど、ユニークな経歴の持ち主である。現在は、柳内伝統音楽院の主宰として邦楽の指導にあたるほか、国士舘大学21世紀アジア学部や柳内調風塾（私塾）で、日本の伝統文化を次世代へ継承していくことに力を入れている。「日本伝統文化の継承」に着目するようになったきっかけは何なのか、また、その重要性を感じる理由は何なのか、伺った。

両親の血を引き、6歳より箏を8歳より尺八を始める

—日本伝統文化に興味を持ったきっかけは？

柳内 私が1歳半のとき、父を戦争で亡くしまして、それを期に祖父母と母と姉、私の5人は、母の友人の御主人が住職をしているお寺の宿坊で暮らすことになったのです。このお寺は約1600年も続く古いお寺だったのですが、私は小学校に入学するまで、修行僧と共に朝4時に起き、読経が流れるなかで育つという特異な経験をしました。これが日本文化に興味を持った最大の理由ではないかと思っています。

—邦楽との出会いはいつですか？

柳内 箏に関しては母が箏の師範だったのです。私が小学校に上がるタイミングで宿坊を出た後、戦後の混

知らないことは恥ではなく、知ろうとしないことが恥
「親」として連綿と引き継がれた日本の伝統文化を伝えていく

乱期のなか、母は生計を立てるために箏、生け花、茶道を教え始めました。そのこともあって、私が箏を触ったのはわずか6歳のことでした。

尺八については、ある日、押し入れのなかに古いトランクがあるのに気づき開けてみたところ、数えきれないほど尺八が入っているのを見つけたのです。

周りに尺八を吹く人もいませんでしたから、我流で尺八を吹いていると音が鳴るようになりました。それを見ていた祖母が、「蛙の子は蛙だねえ。好きだったら習ってみるかい？」と言ってくれたのです。実は、亡き父は日立製作所の経営に携わりつつ、尺八の大家である吉田晴風先生の直弟子だったというのです。

そこで私は、8歳にして、父のお弟子さんだったという先生のもとへ、片道4キロの道を徒歩で通い続けることになりました。「父がやっていたという尺八を自分がやることを通じて、父の心がわかるかも……」という子供心ながらのチャレンジでした。

——その後は邦楽一本でこられたのでしょうか？

柳内 いえ。高校時代には西洋音楽に傾倒するようになっていました。思春期の男の子というのは、総じて親がやることを斜めに見たり、嫌ったりすることがあると思うのですが、私もご多分に漏れず、帰宅すれば邦楽の音がする環境に反発したのでしょうかね。

当時、私は茨城県立水戸第一高校に通学していたのですが、東京に声楽も習いに出るようになりました。大学は芸術大学の声楽科に、と思っていたのですが、県会議員だった叔父が衆議院議員に当選。「お前、秘書をやれ」と言われ、結果的に衆議院議員を三期務めることになる叔父の秘書をすることになりました。

国土館大学の政治学科の第一期生に。 そこで西洋音楽に傾倒

——では、大学には行かずに？

柳内 それが、一体どういう運命なのか、国土館大学の政治学科ができたところで、高校の校長の推薦で国土館大学に入学することになったのです。

当時の国土館大学の政治学科とは、日本の前途を危惧していた人たちが教授陣として名を連ね、時の総理なども講演に来るような一級の教育を施していました。200数名が入学したのですが、卒業したのが27

名でしたからね。勉強も規律も大変厳しいものでした。とはいえ、音楽を志す心には変わりなく、音楽を続けつつ、議員秘書もやりつつ、「大学は趣味」と思っていたのです（笑）。

——音楽はどのような形で続けていたのですか？

柳内 邦楽に反発しつつ、18歳で有料コンサートを主催していたのですが、自分のメインは西洋音楽だという思いは消えず、クラシック音楽会をリードするグループの会員として、世界的に活躍している指揮者や音楽家の方たちとの定期的な会に参加していました。

ところがある日、グループメンバー10数名と夕食を共にしていたところ、「柳内君、君は邦楽もやるんだって？ あのような低俗な音楽をやる人がいまの時代にもいるの？」と言われたのです。

私は、まだ若く、血気盛んだったこともあり、「あなたたちは西洋音楽をやっているけれども、日本人であって、連綿と続いてきた日本の伝統音楽を卑下するとは何事か！」と言ってしまったのです。（笑）。

このときが「だったら自分が日本の伝統音楽を継承し発展させよう、これが自分のライフワークだ」と決心した瞬間でした。

——「邦楽よりも西洋音楽に傾倒していた」のに、思い切りよく気持ちを切り替えられた理由は？

柳内 音楽のなかにも国民性があるからです。例えば仏人、伊人、独人が演奏したクラシックを聞き比べたことがあるでしょうか。これらはそれぞれ大きく異なるものです。ですから、西洋音楽といっても日本人が奏でるものは「日本人」の西洋音楽なのです。私たちのアイデンティティのなかには、太古より連綿と引き継がれ、江戸時代にほぼ完成されたとされる日本の音楽が脈々と息づいているのです。

と同時に、明治以降、日本の伝統や文化が打ち壊されていることに疑問を持っていたことも理由の1つです。音楽ひとつを取っても、厳密に言えば、日本独自の音楽というのはありません。さらには衣食住を含め、あらゆる日本文化は、奈良、平安時代から中国文化を模倣し、韓国文化を取り入れ、熟成させ、日本独自のスタイルに作り上げていったものです。日本の文化が熟成したのは江戸時代に鎖国をしたのも多大なことなのです。

そして明治以降、西洋音楽が一気に流入し、日本人は自分たちが築き上げてきた文化を忘れてしまったのです。

例えば、箏曲の一つである「六段の調」は1641年に誕生し、1685年に没した八橋^{やつはしけんぎょう}検校が作曲したと伝えられている世界に冠たる絶対音楽、純器楽曲なのです。西洋音楽の父と呼ばれるバッハが生まれたのは1685年ですよ。あの、バッハ以前に世界に冠たる曲が日本で生まれているのです。

柴田徳次郎氏、藤沢親雄氏などに多大な影響を受ける

—ここまで音楽に対する想いをお伺いしてきましたが、大学での学び「政治学」からの影響は？

柳内 国士舘大学の創立者である柴田徳次郎先生と、私が師事していた国際政治学者の藤沢親雄先生には多大なる影響を受けました。

柴田先生については、毎週1回、約400人の学生に訓話をする時間があつたのですが、そこで私は「柳内君、人生の目的は何かね？」と聞かれました。当時20歳。答えることができませんでした。

すると柴田先生は「諸君、人生の目的は、親になることだ」とおっしゃったのです。当時は意味がわかりませんでした。ただ、40歳を超える頃になって、「親になる」とは、連続と続いている文化を次世代に伝えていくことだと気づいたのです。「親」という字は、「木」の上に「立」って「見る」と書きます。「親」とは、子を産み、父母になるといった意味を超えて、次の世代に、あるべきこと、なすべきことを指し示してやることなのですね。私たちは、それを繰り返していかねばならないのです。

—藤沢親雄先生についてはいかがですか？

柳内 藤沢先生からは言葉というより生きる姿勢から学んだものが多いです。先生がイタリアの国立大学から招聘され、渡伊する際、「君も来るかね？」と仰っていたことがあつたのです。残念ながら、渡伊の準備をしている最中、先生は息を引き取られたのですが、先生は最期、息を引き取る瞬間まで「自分には時間がない。やり残したことがある」と書き残したのです。そのとき、「人は一生勉強だ」と、強く心に刻

み込むことになりました。

日本の伝統文化の継承者・理解者を育てるべく、指導者となる

—そうした思想をベースに、国士舘大学21世紀アジア学部で教え始めて11年。その真意は？

柳内 1つには柴田徳次郎先生から教わった「人生の目的は親になること」という言葉への恩返しです。「日本伝統音楽」を月曜日に5時限7時間30分担当していますが、21世紀アジア学部の学生には留学生が3分の1います。日本人学生を含め、彼らには、日本のあからさまないまの状態を伝えたいという責任感と使命感で、音楽に限らず、政治も含め、日本文化全体について話をしています。もちろん、尺八、箏、三絃を使った実技も行いますが、これはコミュニケーションツールの1つです。

音楽だけで日本の心を教えようとしても行き詰まってしまうからです。「日本人を徹底的に研究し、いま生きている日本文化を掘り下げること」が私のライフワークで、その1つの手だてとして伝統音楽があるのだと思っています。

というのも、例えば尺八は、技術があれば誰でも吹けるでしょうが、精神性を込めようと思えば、禅宗を学ばなければなりません。それはつまり、尺八とは禅宗から発生した楽器、禅の修行のための道具＝法器だからです。ですから、尺八は「演奏する」とは言わず、「吹定^{すいじょう}する」と言うのです。そのため、江戸時代までは尺八を吹定することができたのは、僧侶・神官・武士に限られていました。そうしたことまで理解しなければ、本当の意味で、尺八の「演奏」はできないでしょう。日本の伝統文化とは、それほどまでに深いものなのです。

—2009年には柳内調風塾を開講されましたね

柳内 国士舘大学からは、ゼミをやってほしいという依頼を何度もいただいてましたが、大学だけでは、伝える人、フィールドが限られてしまうと思ったのです。

また、これまで世のなかを動かしてきたのは私塾だったのではないか、という思いもありました。そこで、邦楽の指導とはまったく切り離して、政治、経済、思想を含めた日本伝統文化を深く理解しながら、塾生

同士が研鑽していきける私塾の開講を思いついたので
す。

「恥を知る」心に気づかせ、自己研鑽 のノウハウを伝えることが人を育てる

——塾生に最も伝えていきたい精神、心は？

柳内 「謙虚」であること。そしてそれには、「感謝の心」が必要であることです。

恥ずかしながら、私は若い頃は、とても生意気な奴
でした（笑）。20代半ばで忙しいときには邦楽のコン
サートを1日に3件も掛け持ちをするくらいでしたか
ら、いい気になっていたのでしょう。

ところが、私が29歳、いまはもうお亡くなりになっ
た人間国宝の先生と舞台を共にしたときのことで
す。通常、偉い先生とご一緒するときには演奏後に先に舞
台の袖に戻り、先生が舞台から引くのを待つのです
が、緞帳が下がり、舞台袖に下がって、ふと先生のほ
うを見たとき、先生がもう一度深々とお辞儀をされて
いるのが目に入りました。緞帳はすでに下がっていま
すから、観客には見えないのに、です。これにはハン
マーで頭を殴られたような思いをしました。

私には「自分はプロで、観客に聞かせてやっている」
という奢りがあり、聴いてくださった方への感謝の気
持ちはなかったことに気がつきました。この日以降、
「人は、いまの自分しか表すことしかできない」と気
づき、舞台で動揺しあがることもなくなり、より一層、
自己研鑽の必要があると考えるようになりました。

この心は「恥を知る」ことにもつながっています。
非常に残念なことに、日本には「恥を知る文化」がな
くなってしまいました。本来は、知らないことは恥で
はなく、知ろうとしないことが恥なのです。ですから、
私とかかわった人たちには「知ろう」という能動的な
自己の行動、つまり自己研鑽のノウハウを伝えていき
たいと思っています。

——ただ、学生にしろ、塾生にしろ、さまざまなタイ
プの方がいると思います。指導のコツは？

柳内 徹底的にその人物、つまり人間性をリサーチす
ることです。どのようにその人の人格や能力が形成さ
れてきたのか。得てして企業は研修を行い、それでよ
しとする傾向がありますが、ビジネスマナーなど、基



▲恥を知る文化を忘れてはいけない

礎的な分野はそれでもよいでしょう。しかし、それ以
上に高みを目指し、彼らのモチベーションを持続さ
せるためには、個別性に注目しなければいけません。

例えば、「風邪」という病気で考えれば、「風邪をひ
いた」という症状＝結果は同じでも、風邪をひいた原
因は人それぞれです。長期的に健全な体を保つには、
カンフル剤ではなく、個別の原因を特定し、補正して
いく作業が必要でしょう。ですから、指導法はケース
バイケースで考えていかなければいけません。

——最期に、今後の抱負を教えてください

柳内 明治以降の戦後教育で日本の伝統文化は破壊さ
れました。ですから私は、「親」として、次世代を生
きる人々に、日本人のDNAのなかに連綿として受け
継がれてきた日本の伝統文化を伝えていきたいと思っ
ています。

それには「未熟さを知ること」が原点にあります。
現代人に欠けているのは自国の文化に誇りを持つこと
です。日本文化にしろ、企業文化にしろ、長く継承さ
れ、繁栄していくためには、一人ひとりがその文化に
対する「誇り」を持つことが重要なのではないでしょ
うか。

——本日はありがとうございました

2012年3月1日、柳内氏宅にて収録

聞き手・構成：フリーライター 堀家由紀子 文責：編集部

インタビューを終えて

インタビューのなかで、新渡戸稲造氏、安岡正篤氏など偉人達
の名前をあげて、日本の原点、人が生きるうえでの摂理、原理
原則についてご教授いただいた。歴史・文化・政治・経済など
選り好みせずに「知ろう」と思いを新たにしたい日だった。

編集部